

京都市基本計画審議会 第1回活性化部会
摘 録

日 時：平成21年11月6日（金）9：30～11：45

場 所：キャンパスプラザ京都2階ホール

出席者：

あきづき けんご 秋月 謙吾	京都大学大学院公共政策連携研究部教授
あそう けいこ 麻生 圭子	エッセイスト
いちかわ みつぐ 市川 貢	北区基本計画策定懇談会座長，京都産業大学経営学部教授
いわい よしや 岩井 吉彌	元京都大学大学院農学研究科教授
かわむら りつこ 河村 律子	立命館大学国際関係学部国際関係学科准教授
しのはら そういち 篠原 総一	同志社大学大学院経済学研究科教授
そん みへん 孫 美幸	立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程
たかしま まなぶ 高嶋 学	京都府政策企画部長
たなか しょう 田中 翔	公募委員
にしむら あけみ 西村 明美	柊家株式会社取締役
ひらい せいいち 平井 誠一	京都市未来まちづくり100人委員会代表幹事，株式会社西利代表取締役専務
ほりば あつし 堀場 厚	京都経済同友会特別幹事，株式会社堀場製作所代表取締役会長兼社長
まつやま だいこう 松山 大耕	未来の担い手・若者会議U35議長，妙心寺塔頭・退蔵院副住職

以上13名

(50音順，敬称略)

◎…部会長

1 開会

2 部会長あいさつ

堀場部会長

第1回活性化部会を始めさせていただく。

審議会総会で部会長を仰せつかった。部会長としてここにいるが、皆様より京都市基本計画について特に詳しいわけではない。しかし、地域に対する強いおもしろいがあり、京都から発信できる活動はたくさんあると思っている。

また、行政が色々な計画を実施するときには、市民がある程度協力しなければ具現化しにくい。これまでに何回も素晴らしい計画が立てられているが結果的に実施されたか、共汗したか、市民それぞれが理解したかと言う点では、あまりうまくいっていない。

そういう意味で、他の部会は平仮名だが、活性化部会だけが漢字であり、この部会こそ行政と一体となって京都市全体の活性化に繋げてもらいたいとの期待を感じたので、部会長を務めさせていただいた。今回はせっかくの機会なので、皆様の京都への思いを出していただきたい。この会議自体が活性化しなければ行政が活性化するわけがない。責任は重大なので委員の皆様に御協力をお願いする。

3 議事

(1) 副部会長の指名

堀場部会長

最初に副部会長を指名させていただく。

副部会長は秋月委員にお願いする。

——（秋月委員、副部会長席へ移動）——

(2) 共汗部会の役割や次期京都市基本計画の構成等について

事務局から以下の資料を説明

- ・資料1 審議会の全体構成と共汗部会の役割について
- ・資料2 次期京都市基本計画の構成について
- ・資料3 分野別方針記載項目（案）
- ・資料3別紙 政策-施策の仮体系（案）
- ・資料4 共汗部会の運営について（案）＜活性化部会＞

(3) 意見交換

堀場部会長

本日は第1回目ということで、今説明のあった資料への質問等も含めて、自由討議をしたい。今の説明ですべて理解できたとしたら市行政に理解の深い方かかなりの予習をして来た方かと思うが、活性化部会に期待されていることは御理解いただけたと思う。

今回はウォーミングアップと言うことで市に対する思いなど何でも結構なので、自己紹介を兼ねて皆様から御意見をいただきたい。その後、我々に課せられた3つのテーマについて討議をしていきたい。今後このような討議をする機会が、毎回2時間ほどあるので、有効に議論していきたいと考えている。

松山委員

私は、9月に作られた若者会議U35という京都の35歳以下の方が集まり、市政に

意見を反映するための組織の議長をしているとともに、観光庁の YŌKOSO! JAPAN 大使も務めている。この部会には、国際観光の面で皆様とお話できればということで入っていると理解している。未熟者だがよろしくお願いします。

平井委員

私は、京都市未来まちづくり 100 人委員会の代表幹事をしており、そういった立場から参加させていただいている。ただ、仕事柄観光産業にも関わりが深い。

100 人委員会の立場からの意見であるが、分野別方針に市民への分かりやすさということが書かれている。これまで行政の施策はどうしても行政のものであり、市民に分かりにくいことが悩みだった。これまでの観光施策は行政と観光事業者が中心であり市民がどう関わっていけばよいのか分からない点もあったが、100 人委員会では、市民、観光事業者、行政がどのような役割分担で進めていけばよいのかが議論されている。そういったこともこの部会に入れていきたい。よろしくお願いします。

西村委員

私は、世代的には団塊の世代であり、戦後の生まれである。戦後、世の中が大きく変わってきた。旅館で観光客をお迎えしているが、京都の魅力が失われつつあるという声を聞く。京都の街並み自体もずいぶん変わってきた。また、景観や観光名所の魅力だけではなく、地域の魅力も観光の魅力と連携していると実感している。京都の魅力を十分に生かせるまちづくりであって欲しいし、女性という立場から日常的な意見も出していきたい、市の政策に生かさせていただければと思っている。

田中委員

市民公募委員である。立命館大学の学生で、昭和 60 年生まれであり、おそらくこの中で一番若い。広島出身で、高知で中学、高校と寮生活を過ごし、京都に来た。京都での生活はまだまだ短いが、学生祭典などで楽しい思いをさせていただいた。学生として京都に来て、卒業後は全国に散ってってしまうので、卒業後も京都にとどまるようなまちになればと思う。

高嶋委員

京都府のビジョン策定の担当をしており、堀場部会長にもお世話になっている。京都府の人口の 57% は京都市民であり、府市協調で進めていきたい。住民からすれば市町村境、県境はただの行政界であり、人や水やお金は広域的に動くものである。こちらでの審議の中身を京都府でも生かし、協調してしっかりとやっていきたい。

孫委員

大学院で多文化教育の研究をしている。この部会に入っているのは外国籍市民懇話会の委員をしている関係だと思っている。私に期待されているのは国際化などだと思うが、それだけではなく、すべての項目に関わるとしており、荷が重いと感じている。しかし、懇話会での意見や NPO、NGO の意見も吸い上げて発信したい。

篠原委員

大きなビジョンを作るというのは、自分が現役であるうちは責任を持てるが、その先は無責任になってしまう。私の役割は先の長い、若い委員の意見をまとめることだと思っている。

河村委員

私は、政策評価委員会に関わっており、その点からこの部会に入っていると思っている。政策指標を作ることだが、評価をするというのは、指標や目標があつてのことなので、その辺りが大変だと思っている。

岩井委員

この3月に大学を定年退官し、現在は家業の林業をしている。この部会では観光分野があるが、私は小さい頃から非常に旅行が好きだった。クルーズに憧れていたが、つい先日エーゲ海クルーズに半月ほど行くことができた。

これについて申し上げますと、ほとんどが外国人で日本人はごくわずかだった。その中で12泊したが、英語ができないと大変しんどく、楽しみが半減する。私のつたない英語で非常に損をしたと感じたので、英語教育が非常に重要だと思う。

また、ローマにも2泊したが、観光都市としてローマと京都を比較するとかなり差がある気がした。ローマの中心のホテルに宿泊したが、このホテルはローマの古い建物を改装したものだった。古い建物を大事に改装し、工事に10年以上かかったそうである。京都も見習わなければならないと感じた。

市川委員

現北区基本計画でいきいき北区まちづくり推進会議というものがあるが、私はその議長を務めており、また次期北区基本計画の座長を務めている関係でこの部会に入っている。

これまでに地元の商店街の活性化と関わりをもち、数年前までは活発に活動していたが、最近は大人しくしている。その理由は、地元の商店街の理事長が大学生重視から老人と子ども重視の方に代わり、大学生に声が掛からなくなったからである。

その後商店街が活性化したとも以前から落ちたとも思わないが、活性化はトップの意識に掛かっている。京都市の活性化ということなので、誰がどういう意識を持つべきかを考えながら会議に参加したい。

麻生委員

京都に来て14年になる。東京で育ち、東京人の視点で京都案内のエッセイを書いていることからこの部会に入っていると思っている。活性化ということだが、守っていかなければならないものも、そこに刺激を与えなければ守れないし、活性化もしていけないということだよそ者を加えていただいたと思っている。京都については、表層的なものしか知らない。京都に来て14年、日々観光のつもりで生活している。京都人の友達が清水寺に1回しか行ったことがないということもあり、よそ者の視点から意見が述べられると思っている。

私が東京に戻らない理由としては、京都は季節が一番近くにあるまちだと思っているからである。東京では、季節を目だけで感じていたが、京都は五感で感じ取ることができる。私は聴力障害があるが、耳で聞こえないものを他の4つの感覚で聞くことができる、一番聞かせてくれるまちだと思って気に入っている。私は聴力だが、他の障害のある方にも、季節や伝統文化を感じさせてくれるまちだと思うので、そこを生かせば活性化に繋がると思う。退蔵院には水琴窟があるが、私はそれが非常に好きである。今は聞こえないが、風のにおいや情景などを感じながら心を落ち着けて聞けば聞こえる気がする。そういうことから商業的なこと、人数だけの活性化だけでなく、数字に表せないことの活性化にもつなげたい。弱者の立場でもあるので、そうした点でもお手伝いできればと思う。

秋月副部長

行政評価等についてお手伝いさせていただいており、その関係でここにいると思っています。計画というのは、一つは京都のまちがこうあるべきだという市民への提案であり、もう一つは、こういう方向で行こうという市役所に対するメッセージである。私の研究領域は後者だが、計画としてはどちらも大事、むしろ前者が大事かもしれない。

大学政策に関して言うと、京都には多くの大学があるが、市立芸術大学以外の大学には、市役所としては一緒にやっていきたいと思いますと言えない二重構造になっている。

また、部会長から漢字と平仮名の部会名に関する話があったが、この部会で扱う行政経営の大綱というのは、役所をどうしていこうかというものである。はっきり言うと、この部会にこれが所属している必要はない。他の部会がこれを引き受けてくださるならこの部会は「にぎわい部会」というような名前だったと思う。役所そのものがどうあるべきかということについて独自に検討する部会だと「行政改革部会」という面白くないものになり、「活性化部会」という構成にしたところに、市役所の苦勞が見て取れる。我々には、独立した3つの分野以外にも、市役所をどうするか、市民と市役所の関係をどうするかという議論をする責任もある。

堀場部会長が御出席できないときには、私が代理することになるので御協力をお願いする。

堀場部会長

皆様のお話を聞かせていただいたが、京都市がこの委員の方々を選ばれたことだけで、半分は成功だと思う。後の半分はこの部会をどのように進めていくかだと考えている。

まず、10年をどうしていくのかのビジョンを考え、それをどう実施するか、行政がどのように関わっていくかにブレイクダウンする必要があると思っている。

京都の品格を上げるために10年後の京都はどうあるべきか、観光や学生の卒業後の問題なども出たが、それぞれ関わっている分野で10年後の京都はどういう姿であってほしいのか、現実に落とす前にそういった夢を語っていただきたい。

松山委員

私は京都の生まれだが、大学、修行時代は関東におり、3年前に10年振りに帰ってきた。私の印象としては、子どもの頃に比べ、住むには住みやすくなっている、京都がだんだん「京都っぽく」なっていると思う。ただし、京都らしいイメージで「京都っぽく」なっているものの、大事な京都の部分がなくなっていると思う。例えば打ち水についても、今はホースで撒いている。昔ながらの京都のルールがおろそかになっており、形ばかりとなっている印象がある。我々若い世代も含め、本当の京都ということを見直していかなければならない。

それから、観光について、国際観光ではトリップアドバイザーという口コミサイトがあり、京都はアジアで一番だが、知名度はまだまだ低い。アメリカやヨーロッパの人は、行ってみたら良いところと評価するが、行こうと思っていない。そういう知名度を上げる必要がある。

堀場部会長

京都らしさには水の撒き方、京都の言葉などがあるが、私が小学校のときはボール紙で京都の山並みを作ったり、桂、深泥池はどのような地域かということ詳しく習った覚えがある。今の小中学生には、そういうことを体系的に詳しく習うなど、京都だけのユニークな教え方がなされているのだろうか。私は京都の言葉を話すことなどを含め教えるべきだと思う。そういうことが建物など、ハードだけでなく京都のソフトの魅力に

繋がると思う。ただし、それは先生方だけでは教えることができない。昔ながらの京言葉を話す人を呼んで教室を開くことなどをしなければならない。お寺の方が協力できることもたくさんあるのではと感じた。

篠原委員

話が変わるかもしれないが、こういうことを考えるときにオープンな組織と閉じている組織がある。企業は非常にオープンな組織であり、一人勝ちができる。クローズなシステムはすべてが関連してくる。京都市は中途半端な組織で、大きな組織のようだが、多くの中の一つでもある。京都が活性化し、勝ちすぎると困る。京都が住みやすいまちになりすぎるとよそが衰退してしまうので、バランスをとる必要がある。

10年後の京都について、私は仲間と勉強会をしているのだが、活性化とは何かと考えると、まちの活性化には、うるおいもすこやかさもまちづくりも入っており、結局は住みやすいまちということに尽きる。

そのためには、10年後をどうしたいということからスタートすることが非常に重要である。具体的には、京都市というまちのサイズでできることとして職住接近ができればよいと思う。例えば、東京だと通勤に往復3時間掛かり、40年勤めるとものすごい時間になる。これはばかげた話で、これを活用すれば、本を読んだり、子どもと遊んだり、音楽を聴いたり楽しく使うことができる。京都はこれが実現できるまちだと思う。その他にもすぐにはできないが10年あればできることがたくさんあるだろう。

堀場部会長

職住接近について、私はよく海外に行くが、京都のように伝統的な文化と近代的な産業があり、1時間以内で通勤でき、30分あれば貴船や鞍馬の本格的な自然を感じられる、こういうまちは世界の中でも京都しかない。なぜ企業が本社を京都から東京に持っていないかというはっきりとした理由として、この環境が挙げられる。

私の会社にも3千人の外国人がいるが、彼らをマネジメントするには、処遇、利益や社是だけでは引っ張れない。彼らは経営トップがどういう価値観でマネジメントしているのかというバックグラウンドを見る。そういうときに京都の食や街並み、伝統、京都の人の喋るスピードなどを総合的に判断して、こういうバックグラウンドなら日本の会社でもついていこうと思う。これがアメリカだと、バックグラウンドが多種多様なために、処遇だけで人を引っ張らなければならない。そういう京都の魅力を、積極的に行動することで成果につなげなければならない。行政はほとんどのことをまじめにきっちりとされているが、それを、どうより少し効率よく、どう外に積極的にアピールするか、プロフェッショナルにするかをこの部会で考えていければと思う。

田中委員

10年先を考えるに当たり、10年前を振り返ると私は中学校に入った頃である。地元の広島市が元気になったなと感じていることを挙げると、広島カープが昨年球場を新しくした。この市民球場を作るに当たっては、市民に募金を呼び掛けたのだが、私が広島にいた頃から呼び掛けていたが、10数年経って去年やっと完成した。それだけの期間が掛かったが、市民はすごく球場に通っている。市民に分かりやすく伝われば変わることができると感じた象徴がこの市民球場だった。

京都では、門川市長になってからの2年間、共汗やDO YOU KYOTO?など色んなキャッチフレーズを出しているが、市民に浸透したとは言えない。環境問題では、10年後は本当に危機的な状況になるという警笛を鳴らしながら、誰かがやるのではなく、市民にムーブメント、行動を起こす分かりやすさが必要だと思う。言葉だけ

でなく、市民が動くようなムーブメントを起こす必要がある。マイ箸などの取組が京都のものだという取組になれば、広島での市民球場のように、市民の誇りになっていくのではないかと思う。

堀場部会長

私に関わっているサッカーの京都サングのスタジアムも実現していないが、実現にはトリガー（ひきがね）が必要である。市民も行政も全てはできない。トリガーがあって、それに協調していくと大きな流れができる。その流れをどう作るのかがこの部会である。

環境についても京都には多くの大学や企業がある。日本人の良いところであり、悪いところでもあるが、理想を追い求めるものの、現実の問題を直視しない。烏合の衆のように流れについていくが、雲行きが悪くなるとみんな離れてしまう。環境もきれいごとだけではないはずなのにきれいごとになってしまっている。京都はわずか2、3種類しかごみの分別をしておらず、分別の面では後進的といえる。なぜ分別ができないのか、分別に意味があるのか、ということクリアにする必要があり、しがらみのない若い人、大学の先生方の特権としてそういうことをズバっと言っていただきたい。

西村委員

柊家旅館は約200年の歴史を持つが、何代か前に取り組まれたことのおかげで今、生かされている。次の世代、次の次の世代を考えて経営している。千年の都として未来に向けたことを考えたうえで、そこから10年後をどうして行くのかという話であるべきである。

人が暮らしやすいまちというのが観光の魅力でもあるし、良いものは時間を掛けて色々な人が関わって生まれるものである。一瞬のひらめきもそうした蓄積があって生まれるものである。若い人のエネルギーや感性も大切だが、年寄りの知恵と融合するという姿勢が何事においても大切だと思う。短期的な計画の中で取り組んだことで観光に対する逆イメージとなっているものも多いのではないか。長い視点をきちんとおいてどうしていくかを考える必要がある。

松山委員

若者会議の中で出てきた意見として、100年、200年、300年先を見て、例えば羅城門などの京都のシンボルを作ってはどうかというものがあつた。シンボリックなものがあれば一体感も生まれると思う。

これは私個人の意見だが、これからは行政、国会議員に頼ってお金を引っ張ってくる時代ではないと思う。しがらみがないので言わせていただくが、25%の二酸化炭素の削減は無理だと思う。いきなり25%と掲げるのではなく、例えば1%アクションとして、必ず1日一つのゴミを拾う、たばこを1本やめるなど、それぞれができる範囲で目標を定め、確実に実行することの積み重ねが将来に繋がる。みんなが参加できる分かりやすい動きを作っていければと思う。

昔の人のおかげで今の私たちが生かされているということもあり、我々も将来の世代につなげていかなければならない。京都に活かされている組織が1%でも資金を出して、将来的に持続可能な京都の景観や文化を守るというような、将来のための受け皿を作らなければならないのではと思う。

堀場部会長

実現不可能なことを掲げることで注目を集めるということもあり、今回のCO₂25%削減につながったと思うが、市民自らが動き、自らが対応しなければならないというア

プローチは大切である。ただし、統計を取る，サポートするといった，市民が1%の削減行動をするための手助けは行政の仕事だと思う。

市川委員

例えば10年後の京都を「世界の観光都市」として打ち出してはどうか。現状では外国人から観光しづらいという声を聞く。京都は何もしなくても人が来る街であり，国外へのアピールができていない。京都はお寺やお茶，お花の家元など，文化遺産が集まっているところであり，着物を着て歩けるまちだという，世界に向けてのアピールを行政からしていただければと思う。

活性化というのは人が集まることである。京都で仕事をしたい，農業，林業に携わりたいという方を集めるための仕掛けが必要である。例えば観光でいうと，世界の観光都市として打ち出したうえで，個々の施設で限界のあることを行政がサポートし，世界に向けてアピールするとともに，京都の良さ，伝統を守る取組をすることが考えられるのではないだろうか。

堀場部会長

観光に限らず，打って出ることも大切である。他の都市では展示会に独自のブースを出すなど企業誘致についても熱心さを感じる。結果的にうまく誘致しているところもあり，そういう努力は行政もする必要がある。京都市もしているとは思いますが，他のまちに比べてはどうか。

観光についても，富裕層の方々が最初に来て，多くの人が来るのは開拓されてからである。旅館は別にして，京都に国際的なファーストクラスのホテルがあるかと言うと1つだけしかない。パリなどは富裕層の方々が最初に来て自国に戻って良さをアピールする，そして，その後に多くの人が来るという流れがある。言い方は悪いが，観光客がごみを落として雑踏のようになる，歩いている舞妓さんの後ろ髪をひっぱるような観光客が来る，というのが我々が目指す観光のまちなのだろうか。

京都の宇多野ユースホステルは建替えて評価が高まっている。そうした若い人向けのアプローチも大切だが，総合的なアプローチをどうするか。少なくとも観光客の人数だけを重視するのはやめたほうがよいと考える。

岩井委員

私は京都の観光は，割りと薄っぺらいと感じている。京都の街並みを見ても清水，祇園，嵯峨野などは整備されていると思うが，そのほかの一般市民が生活しているところは古いものも新しいものもごちゃごちゃで秩序がない。世界の名だたる観光都市では決してそのようになっていない。一般市民の建物も古いものであれば壊すのではなく内装の改装にとどめている。10年後，20年後を見据えて京都の街並みを再考する必要がある。ただ，そういう形を今の若者が望んでいるのかということは考えなければならない。若者が20年後も30年後もに京都に住みたいと感じるまちであるべきである。

日本の農山村は過疎で疲弊している状況の中で，ヨーロッパでは日本に比べ多くの若者，子どもが残っている。ある人が，なぜ残っているのかを村人に尋ねたところ，「確かに都市に行けば高度な教育，医療，娯楽，おいしい食事があるが，それだけでしょ」と答えたそうである。これを聞いた人は，自分でさえも分からないような価値観をもって農山村に住んでいるということに衝撃を受けたそうである。おそらく京都の農山村はこのままでは過疎化が進んで30年後には消滅すると思っている。農山村の良さを見直して何らかの形で維持再生していく必要がある。東京に行けばいいこともあるが，やっぱり京都に住みたいと思ってもらえるような京都になることが一番の基本だと思う。

堀場部会長

私の会社では、東京にも支店を持っているが、そこに京都から人を出している。他の府県の企業だとそのまま東京に住んでしまうが、うちでは京都に帰ってくる。私の留学時代の友人たちはアメリカに住んでいるが私だけ日本に帰ってきている。

韓国も中国も米国への留学生が増えている中で、日本だけが減っている。一面では自分の土地に愛着を持っているといえるが、外に出て行かないという問題がある。生まれてからずっと京都にいて京都のことしか考えていないということが将来の京都を考えたときに一面的になってしまうきらいがあり、広い視野とのバランスが大切である。私の会社の幹部の大半は海外勤務の経験がある。一度外に出ることで、自身や自社を見直す視野が養われると考えている。京都市職員がどれだけそのような経験を積んでいるだろうか。行政職員が他の国の景観、観光を学ぶことも大切だと思う。京都の街並みを守るならば、建物を潰した後は、土壁ではなくコンクリートにしなければならないというような法律との矛盾を解消しなければならない。

孫委員

10年後を考えるに当たり、今1歳の私の息子が10年後、どういう環境ならば育ちやすいかと考えた。やはり住みやすいまちであることが大切で、そのためには京都の良さ、これまでの施策の重層性が増していけばよいと思う。そういう豊かさの中で子どもが育つ地域であってほしい。

具体的には、京都には地蔵盆があるが、昔、私が暮らしていた地域は、御所の北側という比較的中心部であったが、久しぶりに訪れると地蔵盆が高齢者ばかりとなっていた。今は北部に暮らしているが、そこでは100人単位で子どもが集まっている。京都のどの地域に暮らしていても伝統的な行事を体験できることが大切である。また、韓国人が多く住んでいるところでは、コリアンのお祭りなどが行われており、そういう比較的新しい行事も体験できるようになってほしい。

ただし、維持する側の世代交代ができておらず、私が小さい頃にお世話してくれた方が今も世話をしている。私たちの世代が忙しくて手伝えないというワークライフバランスの問題もある。私の夫は育児休暇を取っているが、たくさんのママの中のパパということで、まだ珍しい存在である。

多くの年代が伝統行事に関わることで、観光にもつなげられると思う。

堀場部会長

10年後は、ワークライフバランス、女性の進出が進んでいるはずであり、そのためのサポートがどれだけできる京都であるかがポイントだと思う。

高嶋委員

2点申し上げたい。一つは、京都の特色として美しい自然に囲まれていることが挙げられる。この周りの景観、農業、食べ物が都市を支えている。

もう一つは、今後の議論の中で、論点を人とまちというか、留学生や大学生を含め京都にいる人がどうあるべきか、どうありたいか。おもてなしの心を持った京都人が観光を支える面もある。京都人はかくあるべきということと、景観、雰囲気などハード、ソフトも含めた京都の町はどうあるべきかということを分けて議論すれば焦点が絞れるのではないか。

平井委員

色々なことをすると色々な壁にぶつかる。その大きな壁の一つとして、一丸にならな

いというか、それは誰かがやっているから任せとけばよいと言われることが挙げられる。私は女子駅伝の後援会もしているが、あれだけ京都が連勝しているのに募金が集まらない。京都市の基本計画についても市民一人ひとりが自分のこととして捉えられていない。色々な原因があると思うが、そういうことを解決しなければならない。

また、京都人が京都のことを知らないといわれるが、実は京都に住む人が京都に興味がないのではないか。自分の暮らすまちを、自信を持って大好きになれることが大切である。例えば、市民憲章について言うと、大津市や亀岡市では大きな式典の前に市民憲章を大きな声で言ってから式典を始める。京都市民は市民憲章を言えない。それも当然で、この憲章は60章くらいあり、中には道につばをはかないというようなことまで書いてある。こんな京都市民であってほしい、なぜならこんなまちを作りたいから、という市民がともに目指すべき合言葉にできればと思う。

河村委員

先ほど政策評価に関わっているという話をしたが、専門は農業経済学である。ただし、普段は一介のおばちゃんとして地蔵盆も実施した。

先ほどから観光や大学・国際化に関する話が出ていたが、ある意味、花火的というか京都市として外に打ち出すものだと思う。それを一人ひとりの市民がどこまで自覚しているかという、必ずしも市民全員が、京都が観光都市を目指している、といったことは実感していないのではないか。一方、地下鉄延伸などの政策の恩恵を受けていることは事実である。そういった市民感覚のところで、外から見た大きな話を理解しながら進めなければならない。私自身普通のおばちゃん感覚も入れながら話ができればと思っている。

麻生委員

10年前に比べると京都は非常に住みやすいまちになったと思う。ただし、よそ者から見るとこのまま便利になっていくと、他の都市の亜流になり魅力がなくなってしまう。進化しているが深化していない、浅くなっていると感じる。

「一見さんお断り」やお店に入っても店員にちらっと見られるだけで冷たくされるような京都だが、それが魅力である。お店の人に呼び込みされるような京都、さりげなくではなく、びしゃびしゃに打ち水されているような京都は、本当に求められる京都ではない。いけずと言われたくないがために過剰にサービスしてしまっていると思う。五感を働かせて京都人の本音を読み取らなければならないところが京都の魅力であり、何でも便利にしていくということでは逆にそっぽを向かれるのではないか。ほどほどが大切である。

秋月副部長

ここまでの御意見の中には、場合によっては対立、矛盾するものもあった。まとめるのは大変だが、テーマごとに絞って議論すればはっきり分かるのではないか。これまでの京都はオープンにしすぎてしまったところもあった。これを無理に閉じるのは難しいが、一方、京都人の定義は本来もう少し広いものにできるのではないか。例えば、私は神戸出身で、京都に来て30年だが、「私は京都人です」と言うとき京都の人には「違う」と言われる。色んな人が実は京都を支えているということに気づかなければ京都はもたないのではないか。

また、俗に市民感覚として最近の京都市について思ったこととして、私は、ある審議会で「原油価格急騰に対する緊急対策融資」についてOKを出す立場だったが、その頃にはすでに原油価格は暴落しており、もはや意味がなかった。また、ある時には京都市

から表彰状とともに分厚い額をもらったが、私にはこんな額は不要である。単にお金の無駄があるということではなく、受け取る側も色々な人がいるので、一言メールで額縁の必要の有無を確認してもらえればよかった。もう少し市民の側に寄った機動的な行政になっていただければと思う。京都市は行政改革が進んでいるとは思いますが、もう一步市民のことを考えてもらいたい。

堀場部会長

京都以外から優秀な人が集まって結果的に京都ができた。そういう意味では優秀な方が集まってくるようなまちを目指すということが今日までの一つの流れだったかと思う。そういう意味では皆様に満遍なく御発言いただき、言いたいことを言っていただき、本日はウォーミングアップとしては合格点であったと思う。今後とも御協力をよろしくお願いします。次回は、「観光、大学・国際化」をテーマとして、少し焦点を絞って議論していきたい。

事務連絡があればお願いします。

——（事務連絡）——

4 閉会